

食べるストーリー

五島顕一

小説家古縫^{こぬいさなえ}早苗は悩んでいた。

「ネタが浮かばないよう、うう」

パソコンの前で固まってしまった。そのパソコンが囁きかけてくる。ネットであれこれ見てるうちに、何かしら思いつくだろう、と。

「そんなちんたらしてる時間ないんだよう」

元アメフト出身の格闘家二人分ぐらいはありそうな本棚が背中から威圧する。これだけの本を読んできて、何がネタ切れだ、と。

「う、うるさい」

全く浮かばないわけではない。

これは、と思い書き出してみても、いつの間にか登場人物が勝手な言動を始め、事件の切っ掛けにさえ触れようとしない。構想の一番初めに立ち入ることすらなく、何気ない平和な日常に立ち戻ってしまう。

謎の郵便物を開ける前に、買い物に行ってしまう。

帰宅したら疲れて眠り、何日間か経過。その後、謎の郵便物は溜まってきたダイレクトメールやらチラシや

らと一緒に捨てられる。

一人だから何も始まらないかと思つて二人目を投入し、けしかけさせても、のらりくらりとかわし続け、ついにケロちゃん疲弊。木之本さんは引き籠もり続行を決意。

ああ、こんなグダグダではいつまでもグダグダではないか。まるで今の私の状況。放置された洗濯物の山。買い物サボっていた証左である冷蔵庫の空隙。

そこまで思い至つて、台所の蛇口から水滴一つ、シンクを打つて脳まで響く。

「そうだ、今の私を書こう」

ああ、なんて素晴らしいアイデアなんだ。

残念な状況を打ち砕くには、それそのものを扱わなければいけない。

私は随筆を本格的に書いたことはない。

隨筆になるほどの稀有な人生経験や生活をしているとも思えない。観察眼にはそれなりの自信はあるけれど、そもそも今書かなければならないのは小説だ。

つまり、私小説。

水滴の音はまた一つ垂れた。水道代の無駄を主張していたかもしれないけど、今は構わない。

そのままの私を書くのは何となく照れくさい。では、どんな私にしようか。

小説家ではなくて、同人作家で、仕事の現実逃避を兼ねてサークルに参加していることにしよう。昨今のコミケ未だ大盛況の世の中だもの、共感できる人は多いはず。

性別は男にする。小説として客観的に書きたいから変える。

年齢、二五歳。

嗜好はオタクっぽいけど、フィギュアだとかのグッズにはまだ手が出ていないから、部屋はそれほどでも

ない。アニメやライトノベルは正しい姿勢で鑑賞する。一人暮らしはやっぱり一人暮らしにする。

そして現在、次期同人誌へのアイデアが思い浮かばないとところから書き始めよう。

「名前、どうするかな」

電話帳で適当に、というのも方法だけど、今回は自分自身の延長線だ。自分のペンネームをもじってみるか。本名だけど。

古縫早苗、こぬいさなえ、コヌイサナエ。

一文字ずつ若くしてみる。ケニアコトウ。ケニア孤島。「ぶっ」

おもわず吹き出しそうになった。ケニア孤島ってなんてびっくりな語感。ケニアが孤島。内陸国なのに孤島。ブワツハツハ。

まさか自分の名前にこんな秘密があつたなんてね。

他の人にはどうだかわからないけど、私にはツボだわ。

机に突っ伏してひととおり笑いが収まるのを待って、

ケニアコトウをもう少しじつた。ケニアコトウ、ケニーゴトウ、ケニー後藤。よし。

ケニー後藤君、これが君の名前ね。今後ともよろしく。

ケニー君は最初、小説のアイデアが浮かばなかったんだけど、ふと思いつくの。

二八歳のコバサンが、小説のネタを思いつく話。

私、小説家なのよ。ケニー君の憧れの職業。ケニー君は安定志向で、全く関係のない仕事に就いたけど、私は夢を追いかけた。裕福ってほどでもないけど、ときどき友達と飲みに行けるくらいの生活。ここまで来るのにもかなり苦労したわ。ええと、話が逸れたわね。そんなヒトでもときどき、何も思いつかないときがあつて悩む時がある。君が今何も思い浮かばないのは、君に小説の才能がないからじゃない。生活に少し余裕がある私だつてそういう時があるの。落ち込まないで。元氣出して。

それでね、君の小説のコバサンが思いついた話つて

のは、今の君みたいな同人作家が今の私みたいな小説家の、私みたいな状況を思いつく話。

さあ、頑張つて。

古縫早苗は草稿にここまでまとめたところでふと思う。何だか私つてお節介オバサンみたいね。自分で創作した人格にここまで入れ込んで、馬鹿みたい。でも、ここまでアイデアが煮詰まったんだから、今度こそちゃんと書けるわ。

それからケニーは早苗のことを我武者羅に正確に書き、早苗はケニーのことを丁寧に書いた。

同人誌製作の会合で良く書けていると褒められたことを共に喜び、出版社の担当が感激したことで一緒にはしゃいだ。

ケニーのサークルがイベントに参加し続けるにつれ、他のサークルとの交流が広がり、着実に名前が染み渡っていく。その地道な活動を描いた早苗の連載は静かに読者の心に沁み入り、ファンを掴んでいく。雑誌が出るたびに感想ハガキが少しずつ増えていく。

三年後、早苗がついに雑誌の看板連載になったところ、ケニーはコミケの外周サークルで元気に売り子をしていた。早苗、三一歳。ケニー、二八歳。

ある日、早苗は担当者に近所の喫茶店へと連れてこられた。外資系のチェーン展開しまくっているようなセカセカした雰囲気のところではなく、近所の客しか来ない、地域に根差した喫茶店だ。

早苗はこのコーヒーが好きだった。早苗が売れないころ、友達とふらりと入ったのが最初だった。彼女は後で水みたいな薄さだと言っていたけど、濃すぎる

コーヒーを入れられると夜の寝つきが悪くなる早苗にはちょうど良かった。それ以来、どこかに行くついでに立ち寄れるときにはいつもコーヒーを頼んだ。友達には早苗を偏屈だつて言っていたな。

連載が好調になってからここの喫茶店で偶然友達を見かけたとき、彼女は彼氏連れだった。

「ここのコーヒー、おいしいでしょ」

「うん、そうだね」

「この店、作家の古縫早苗のお気に入りなのよ」

「へえ、よくそんなこと知ってるね」

そんな会話を不意に思い出した。

ふらふらと給仕の案内についていくと、一番奥の席に、編集長が座っていた。

編集長は、本題とは全く関係ないであろう、今日の天気のことや私の体調の心配のあたりから話を始めた。それから、なかなか本題に辿りつかない。担当者視線を送ったり、天井へと視線が泳いだり。

随分と回りくどい。事務屋は速度が命だろうに、そんなに切り出しにくい話なのか。編集長が出てくるほど重要な事柄なのか。

「で、本題はなんですか」

年代物の柱時計の針の音が響く。

編集長はコホンと一つ咳をして、視線を真っ直ぐ早苗に向けた。

「三ヶ月後か六ヶ月後ぐらいに新連載を始めるのはいかがでしょうか。新鮮な題材とストーリーで読者を掴めると思えるのです。」

「先生の腕と発想があれば何てことはないですよ」

ああ、そういうことね。

「はは、上手いわね三井君。ところで、今の連載はどうなるの」

担当者は目を伏せた。

「先生、申し訳にくいんですけど」

口ごもりそうになった担当者の言葉に編集長が被せ

て言った。

「古縫先生」

どこかの席で、フォークの先が皿を小突いた。そのわずかな音で、編集長の言葉が止まってしまった。

椅子の足が床を引きずり、レジスターがレシートを打ち出す。

給仕と客が何やらとやりとりし、入口のベルが鳴った。

「分かりました、編集長。今の連載はあと2回くらいで終わらせればいいですね」

「あの、先生、そんなに無理な終わらせ方をしなくてもいいですよ。あと五回は大丈夫」

「三井君」

担当の軽口を編集長が制した。

「古縫先生。先生の連載は今や雑誌の看板ではありませんから、先生に無理を言うのは辛いのです。しかし、同人界隈を魅力的に描く先生の作品だからこそ、大御所作家が顔をしかめているのです。今は私が宥めてか

わしていますが、先生の作家人生を考えますと、誠に僭越ながら」

「そんな重たい話聞かされて、逆に首を縦に振り難いです。圧力に負けたみたいで、何となく嫌です」

相手が最後まで言い切る前に言葉をつないでいく。顔面に熱を帯びてきているのが自分でもわかる。

「無理強いはしていませんし出来ません。先生あつての弊誌なので、指図するようなことは出来ません。あくまで新連載は提案として、賛同していただくかどうかは、先生の自由意思です」

ずるい。

そんだけの事情があつたら、ほとんど選択肢が無いじゃないの。それなのに連載終了は私の意思で終わらせたことにしたいわけなの？

将来何かあつたときの責任を回避したいの？

「分かった。あと2回か3回で今の連載を終わらせるわ」

どうしたらいいのよ、ケニー君。

私が自宅の机に向かうと、ケニー君の行動は早かった。

ケニー君の作品が人気となると、他のサークルからシナリオ依頼が舞い込むようになった。特に、同人界で人気のある、とある女の子だらけのシューティングゲームの二次創作サークルからの依頼が多かった。ケニー君もこのシューティングゲームのキャラクターには興味津々で、仕事に差し障りのない程度に依頼を受けるうち、早苗のことを書き続けるのが段々難しくなってきた。

そうよ、ケニー君。あなたの憧れの作家はこんなところで連載を終えなければならぬ、下らないコバサンなの。はじめな私のことなんか早く忘れてよ。あなたはもつと輝いて。

「もしかして、古縫早苗先生ですか」

買い物帰りに呼び止められた早苗が振り返ると、青のチェック柄のシャツにリュックサックという冴えない見た目の青年がいた。

「え、どうしてそれを」

「後藤です。ぼ僕、ケニー後藤です」

髪がツヤツヤしている。

早苗は最初こそ疑っていた。しかし話しているうちに、早苗の知っているケニー後藤と彼との共通点がどんどん浮き上がっていく。一人の女性作家の人生をリアルに描き、今は参加してるサークルがコミケの外周を陣取っている。最近ではシナリオ依頼も受けるようになり、ノベルゲームを開発している会社の人とも会うようになったそうだ。

「ケニー君、本当に、本当に君はいたのね」

「僕も、こうやって先生と直に会えるなんて感激です」

お互いに話したいことはいっぱいあって、いつの間にか自宅についていた。

早苗の拙い手料理を、彼はおいしい、おいしいと

言って食べてくれた。

彼は早苗の性感帯をすぐに探り当てた。

彼は本当に私のこと、ずっと見ていてくれたんだと、早苗は思った。

それから数日、彼は昼も夜もゴロゴロしている。

他のサークルに提供するシナリオはようになっているのと聞いたら、今はアイデア練っているところ、だと言い、しばらくして寝息が聞こえてくる。

本当に会話をしなくなった。向こうから声をかけてくるのはメシだとかフロだとかぐらい。たまに起き上がってきたら、私が執筆中でも構わず尻を撫でたり胸を触ってくる。その度に応じている私もどうだか、と早苗は思っている。

彼が寝息を立てている間の今こそ、ガンガン書けるチャンス。早苗はいよいよ最終回を仕上げるべく、パソコンの前で気合いを入れた。

ケニーは言った。

「今、先生の隣の部屋で

「え、ちよつと、何書いてるのよ私」

思わず口走った。

バックスペーススキーに目をやるが、両手は早苗の意思とは関係なく、文字を打ち込み続けた。

ケニーは言った。

「今、先生の隣の部屋でいるのはケニー後藤ではありません」

私疲れてるのかな、もう寝なきや。

あんなに私のことを知ってる彼がケニーじゃないなんて。

「しつかりしてください。今同人界で売れっ子って自分で言ってしまうのも心苦しいですけれども、そんな人が、そんな食っちゃ寝できますか」

そう言われればそうかもしれないけれど、でも彼、私のことあんなにも知っているのよ。

「知っていて当然です。先生が書いている小説の中で、私が先生のことを書いていて、それが有名になっているのですから。彼は先生の作品の読者なのでしょう」

でも、私、性感帯の話まで書いてないわ。

「え、先生、彼の手を取って導いていたの、無意識だったのですか」

うそ、そんな、私ってそんな女だったなんて。

「ショックでしたよ僕も。先生のあるところ」

そんな、私、ケニー君に嫌われる。それだけは止めて。忘れ去られてもいいけど、嫌いにならないで。

「取り乱さないで。とにかく、あの男は危険だ。架空の人物になり済ましてヒモになろうだなんて」

早苗は必死だった。どうすればいいのか、次の言葉のために画面に顔を張り付けた。

「担当の三井さんに連絡して。彼や編集長にはバレないように」

買い物の振りをして出かけた早苗は雑誌社に出向き、駐車場の三井の白の軽ワゴンに張り付いた。

しばらくして、後ろからの声に早苗がびっくりして振り返ると、三井がニコニコしていた。

「今度の新連載は探偵ものですか。楽しみです」

三井が警察という言葉が発すると、それまで背中では返答していたニセ後藤がいきなり振り返り、「何が悪い」と声を張り上げたが。それ以上の声で三井が「不法占拠」とだけ叫ぶとニセモノは急に縮こまった。

「さあ、早く逃げたほうがあなたのためですよ」

三井は声のトーンをいったん落として、一転声を張って手を叩いた。

「さあ！」

ニセモノは飛んで行くように逃げていった。

その日の夕方。

書斎の扉は開けっぱなしで、柔らかな空気が流れ込んできた。

西日が眩しくて暖かくて、早苗は自宅のパソコンの前で一人ぐずっていた。

ありがとう。助けてくれて。

「いえいえ。当然のことです」

どうして。

「先生が僕の憧れだからですよ」

確かに私はケニー君をそういう設定で書いたわ。

「設定だとしても、僕の気持ちは本物です」

設定を書き変えたら変わってしまうのよ。

「それは私に似た誰かです。ドツペルゲンガーの話なんてしないで下さい」

こんなダメなコバサンでもいいの？

「誰がコバサンですか。とてもセクシーじゃないですか」

それを言いたいんじゃないかと、その

「分かってますよ。そういう弱いところ、人間的なところも含めて好きなのです」

あ、今キユンときた。

「作家先生らしくない表現ですね」

胸の中の心の臓と肺の臓が同時に少し引き絞られるような、そんな思いがしました。

「くどいですね」

作家で遊ぶな。

「すみません。こんなやりとりももう終わりかと思うと」

そうね。名残惜しいね。

私、あなたがいないと、やっていけないかも。

「情けないこと言わないで下さい。僕は女流作家の半

生を描いた小説に大きなオチをつけて一旦オリジナル創作からも手を引き、巫女さんや魔法使いの二次創作にシナリオを提供することにした。ちゃんと幕引きで来てるじゃないですか。さあ、最後の読点、打ってください」

早苗は最後の読点のキーを右手薬指で押し込んだ。
不思議な事が起こる。

右手の薬指がキーから離れない。それだけではない。
全身が動かない。息もできないが、苦しいとは感じない。

時計の振子が傾いで止まっている。

「ああ、そうか。ストーリーが終わったから動けないのか。最初から私、後藤君の物だったのね」

食べるストーリー

2010年 3月30日 公開

著者 五島颯一

編集人 今出川潤

連絡先 vert@bugyo.tk

企画・制作 ver.T

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。